

## 「主イエスの福音宣教の初め」

2014年07月05日

マルコによる福音書1章14節～15節。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」

洗礼者ヨハネは領主ヘロデの不義な結婚に抗議しました。怒ったヘロデはヨハネを捕え、投獄したため、ユダヤ全土を揺り動かした洗礼運動は終わりました。主イエスの時が来たのです。主イエスは故郷ナザレを去り、ガリラヤに現れました。ガリラヤの民衆は政治的にはローマ帝国、経済的にはヘロデ、宗教的にはエルサレム神殿とファリサイ派の人々に、あらゆる面で差別と収奪を受け、貧しく苦しい生活を強いられていました。主イエスは、このガリラヤを福音宣教の地としました。ここに、主イエスの思いが込められています。

主イエスの福音宣教の初めの言葉は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」でした。三つの言葉が宣言されています。始めは「時は満ち」です。パウロはガラテヤ書4章4節に～5節に「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした」と書いています。神が人間を贖い出して神の子とするため、御子を遣わされた時（神が関わるカイロス）が来たのです。

二つ目は「神の国は近づいた」です。「神の国」とは神が生きて働いている事態です。事態は観念や理念ではなく、生きておられる神が見え、体験できる状態です。ルカ福音書17章21節に「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と記されているように、私たちの間で働く神のリアリティーです。神の国が主イエスの出現によって「福音」として到来したのです。

三つ目は「悔い改めて福音を信じなさい」です。悔い改めは方向を転換することです。福音へと向きを変えて信じる。それでは、信じるべき「福音」とは何であるのか。それが最も重要な問題となります。代々の教会は「福音」を宣教しようと、言葉と行いを模索し続けてきました。私は「福音」は神が共におられる（インマヌエル）事実だと信じています。神が共におられるから、私は神に絶対的に是認されている。私の生は神に根拠がある。自分を受け入れられないと拒絶しようとも、他者から私の存在を侮蔑されようとも、神は主イエスにおいて「よし」と宣言してくださっている。そして、この宣言は私だけではなく、全ての人々に及んでいる。共に生を受け入れ合って生きる。これが、インマヌエルの「福音」です。ですから、人間を蔑み、否定する言葉と行いに対し断固として異議を唱えるのです

神のない世界は無意味に生まれ、暗黒の死に飲み込まれていく虚無です。パウロはコリント15章で、主イエスの復活を力強く論述しています。32節に「もし、死者が復活しないとしたら、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか』ということになります」と書いています。パウロは、主イエスの復活に神を見て、信じたのです。主イエスの復活に啓示された神は、どんなことがあっても共に生きるように恵み、祝福してくださっている。この福音に心と体を向け、信じて生きる。主イエスの福音宣教は、三つの宣言から始まっています。